

Dickens における Benevolence の変容

— *Bleak House* 試論 —

諏訪間 裕 子

I

Dickens の人物の持つ善意を分析することは難しい。Dickens の描く善意は、余りに単純で理由のないものであるから、改めてそれを理論づけるとなると、その背景を探ることは容易ではないのである。Humphry House によれば、Dickens は人間の親切心の最も共通した点や純粹なものを取り出して、それらを強調したので、彼の描く good people は思想を持たないし、また考え方の偏向を防ぐためにその行動の範囲は狭く、無色で家庭的なものであるという。また、House は次のようにも述べている。

... the goodness of the leading Dickens moral characters, from Pickwick to Boffin, depends on just those two things — personal affection and general philanthropy. They are all good-natured, and seem to act as they do because they cannot act otherwise. Not one of them has a moral policy, or a considered opinion about why he does good. They seem to have no temptations, difficulties, or struggles: they are uniform, unruffled, and unreflecting.⁽¹⁾

このような Dickens の描く善意は、romantic benevolence であると Houghton は言う⁽²⁾。当時の厳格なピューリタニズムによれば、慈善が善意の自発的表現ではなく、宗教的義務の遂行であったことを考えてみると確かに Dickens の慈善は当時の Christian benevolence とは異なる、単なる romantic benevolence と言えるかもしれない。しかし、*Bleak House* の Jarndyce の場合を考えてみると、「ロマンティックな慈悲心」という言葉で彼の善意を片付けてしまうのは、少し大まかすぎるように思われる。

Dickens のいわゆる “the Good Rich Man”⁽³⁾ と言われる人物たち、Pickwick から始まり、Brownlow、Cheeryble 兄弟、老 Chuzzlewit、Scrooge、Miss Trotwood などの善意は超人間的で、現実の世界ではとても考えられないロマンティックなものである。それは裏返せば、余りに機械的であるとも言えるかもしれない。これらの人々を描くときの Dickens は、善は人間が自ら行なうものではなく、神の意志によって行なうものと信じているかのごとくである。これらの人々の善意に比べて、Jarndyce の善意には矛盾や不可解な点が多い。この不可解さは、ロマンティックな不可解さではなく、むしろ逆に、彼の善意が現実的の矛盾に満ちているために感じられるものなのである。Jarndyce は自我を持たない無色の人間ではないし、慈善以外にすることのない神々しい存在でもない。彼は現実の自分と自分に身近なものの不幸を忘れるために善を行なう、ある意味では自己を棄て切れぬ弱い人間のように私には思われる。Jarndyce 以前の Good Rich Man と Jarndyce の善とは、根本的に異質のものではなからうか。もしそうであるとしたら、どのように違うのか。Jarndyce の “eccentric gentleness” (6 章) の本質を突きとめてみたい。

II

Dickens の善人たちは子供のイメージで語られることが多い。Pickwick は Angus Wilson が言うように、 “an adult child” であるし⁽⁴⁾、Cheeryble は “… he cast beaming looks of affection, which would have been most delightful to behold in infants, and which, in men so old, was inexpressibly touching” (35 章) とあるように、やはり子供のような表情をしている。また、Captain Cuttle は “No child have surpassed Captain Cuttle in inexperience of everything but wind and weather” (2 章) であるし、善人 Joe は Pip の目に “a larger species of child” と映る。Boffin 夫妻は、 “… they began, like

single hearted children, to recall their love for me when I was a frightened child” (2巻9章)と Rokesmith によって描写されている。これらの人々の内にある善を表現するために、Dickens は彼らを生徒にたとえている。子供の持つ汚れない純粋さ、無邪気さが、人間の善意を表現するのに最もふさわしいと、Dickens は考えたようである。そして時には、その純粋さは神々しいまでに高まり、遂にはこの世のものとは思えぬ人間像を造り出す結果となっている。そしてこれが多くの benevolent gentlemen の特徴であろう。

John Jarndyce の場合、他の多くの慈悲深い仲間とは異なり、彼は完全な大人である。この小説の中で、彼について子供のイメージで語られている部分を探することは不可能である。しかし、Esther の言うような Jarndyce の “eccentric” な要素は、彼を単なるやさしい大人にとどめてはおかない。Jarndyce は東風が吹くと、“Growlery” と呼ぶ自分の部屋に閉じこもってしまう。何か能力に及ばないこと、悲しいことが起ったり、耐えられない事実を見せられたりすると、Jarndyce は東風にことよせて、自分の失望を知らせるのである。そして “Growlery” にこもり、東風から一時的に身を守るのである。Esther は Jarndyce の東風を次のように解釈している。

Ada and I agreed . . . that this caprice about the wind was a fiction; and that he used the pretence to account for any disappointment he could not conceal, rather than he would blame the real cause of it, or disparage or depreciate any one. We thought this very characteristic of his eccentric gentleness . . . (VI)

このような Jarndyce の態度は、一方から言えば非常に自己中心的で消極的なものである。大らかで子供のような無邪気さを持った、かつての Pickwick や the Cheerybles、そして寛大で惜しみなく与える Brownlow などとは雰囲気は異なっている。あらゆる人間を何代にもわたって、次か

ら次へと果てしなく飲みこんでは滅ぼしていく Jarndyce and Jarndyce の訴訟の中心人物であるならば、その影響を受けて Jarndyce が本来の善意を十分に発揮できないのは当然であると考える人は多い。そして Dickens 自身、*Bleak House* を書く頃になると、個人の善意が社会の悪に対する万能薬であるという自信を失ってきたということもよくなされる解釈である。しかし、私はここで Jarndyce の "eccentricity" を Jarndyce という一個の人間のこととして考えたい。

訴訟の渦中に巻き込まれて、次第に自分を失い性格が傷われていき、身を滅ぼしてしまう青年 Richard がいる。彼はなぜ Jarndyce も訴訟のために性格が変わったりしないのかと、Esther に尋ねる。

If I have the misfortune to be under that influence, so has he [Jarndyce]. If it [the suit] has a little twisted me, it may have a little twisted him, too It taints everybody. You have heard him say so fifty times. Then why should he escape? (XXXVII)

これに対して Esther は、Jarndyce は「並み並みならぬ性格の持ち主で断固としてその渦中に巻き込まれまいとしているからだ」(… his uncommon character, and he has resolutely kept himself outside the circle) と答えている。しかしすでに Jarndyce 自身も認めているように、渦に巻き込まれまいとする努力のために、何度南風が東風に変ったか知れないのである。彼は多くの孤児をひきとって育てたり、金銭的な援助をする。しかし、それでもなお東風は吹く。人を助けるための努力は惜しまないが、自分の持っている善意が外の悪によって損なわれることを Jarndyce は恐れているからである。Jarndyce は訴訟という現実の悪からは自分を守ることはできたが、その戦いの間に、それ以外の悪に立ち向かう気力を失い、自身をも奇人にしてしまった。Jarndyce は Lauriat Lane の言うように、"arm or armored virtue" (5) によって外の悪と戦ったのである。しかし、徳とは本来防備されねばならないものであろうか。その矛盾が彼の eccentricity となって表われ、そして読者に次のような不安を与えることになる。

Of Old Jarndyce himself, too, is so dreadfully amiable and supernaturally benevolent, that it has been a common opinion during the progress of the book, that he would turn out as great a rascal as Skimpole; and the fox on the symbolical cover with his nose turned to the East wind has been conjectured by sotle intellects to be intended for his double. We rejoice to find that those misanthropical anticipations were unfounded; but there must have been something false to general nature in the portrait that suggested them.(6)

Ⅲ

Jarndyce という人物を考えると、Skimpole に対する彼の評価は重要である。Skimpole は「歳月、苦勞、經驗という普通の道を経て人生を歩んできた人とは、態度や風彩が全く違う」人間である。金と時間の観念を持たず、寄生虫のように Jarndyce に依存し、芸術家としても、夫としても父親としても責任のひとかけらもない男 — この Skimpole を Jarndyce は善意をもって受け入れ、そのみか彼のあらゆる面倒をみている。このような Jarndyce の態度を多くの批評家は、善は悪の巧みに騙されやすいからだとか、Chancery の世界の悪が善人の眼を曇らせたのだとかいう判断を下してきた。しかし私は、Jarndyce という人間のもう一面の姿をここに見つけ出すことができるように思う。

Jarndyce は Esther に「この世の中で最もすばらしい人 — 子供」として Skimpole を紹介する。

"There's no one here but the finest creature upon earth — child." "I don't mean literally a child, ... not a child in years. He is grown up — he is at least as old as I am — but in simplicity, and freshness, and enthusiasm, and a fine guileness inaptitude for all wordly affairs, he is a perfect child." (VI)

かつての "Good Rich Man" の姿を、私はこの描写の中に思い起こさずにはいられない。Skimpole の「子供らしさ」は、歪んだ鏡に写した

Jarndyce 自身 — 持つことなく終ってしまった彼の子供時代 — の象徴と
なっているように思われる。そして、彼のみならず彼の回りにいる孤児た
ち、子供であることをすでに放棄している子供たちによって置き去られた
奇形の子供時代を、Skimpole の奇形の幼稚さの中に Dickens は象徴して
いるようだ。

Jarndyce の回りにいる子供たちは子供時代を持たない。Q. D. Leavis が
述べているように、Bleak House の世界では、皮肉にも Skimpole 以外に子
供らしい子供は生まれないのである。

He [Skimpole] is, with his mock-innocence, a pseudo-child, yet
in so far as he is a child at all, the only one in the novel.⁽⁷⁾

Esther は、「母の知る限りでは、一度も呼吸せず、埋葬され、生命も与
えられず、名前もついていなかった」(36章)というように、母なくし
て生まれたかのごとき子供であった。Richard は "Jarndyce and Jarndyce
was a curtain of Rick's cradle" (35章) というほどに、子供時代を
経ずして訴訟の中に押しこまれてしまっている。また、Charley Neckett
は「たいそう若いのに、不思議にも子供っぽい姿にたいそう似合う大人び
た落ちついた態度を身につけて」(15章)、弟たちの母親代わりをして
いるし、Caddy Jellyby は母親がアフリカの慈善運動に熱中している家庭
の主婦代わりとなり、父親を「まるで苦しんでいる、哀れな頭の鈍い子供
にでもするよりに」いたわるのである。この子供たちは Smallweed 家の
子供たちのように、最初から "little old men and women" として生ま
れたのではなく、健全な環境の下ならば健全な子供時代を過ごすことで
きた人々である。

Jarndyce は余りにも多くの苦しい証拠を見過ぎていた。そのため、い
つも変わることのない無邪気さ、子供の無責任さという Skimpole の見せる
幻想に空しくしがみついていくのである。Skimpole は人の善意について次
のように勝手な解釈を下している。

"It's only you, the generous creatures, whom I envy . . . I envy you your power of doing what you do. It is what I should revel in, myself. I don't feel any vulgar gratitude to you. I almost feel as if you ought to be grateful to me, for giving you the opportunity of enjoying the luxury of generosity. I know you like it. For anything I can tell, I may have come into the world expressly for the purpose of increasing your stock of happiness." (VI)

確かに Skimpole の言うように、Jarndyce の方でも失われた子供時代に対するノスタルジアから、善を施すという「ぜいたくを楽しんで」いるのかも知れない。Jarndyce のこのような "eccentric gentleness" を Esther は十分に理解している。

It seemed to me, that Skimpole's off-hand professions of childishness and carelessness were a great relief to my guardian, by contrast with such things, and were the more readily believed in; since, to find one perfectly undesigning and candid man, among many opposites, could not fail to give him pleasure.

(XV)

Jarndyce のもう一人の友人が Boythorn であることを考えると、Jarndyce が子供らしさに求める "relief" の不安定さが更にはっきりしてくる。

Boythorn は気短かで大声で話し、たくましい体つきをした男である。しかし、彼も子供の世界に住んでいるもう一人の大人であった。Sir Leicester とのつまらぬ土地論争に自分のある限りのエネルギーを使い、Skimpole が彼のことを "an amiable bull, who is determined to make every colour scarlet" (4 4 章) と言っているが、すべて物事を大袈裟に考える。子供の持つ無責任さを大人の世界にまで持ち続けている点では、Skimpole と同類であろう。Boythorn と Skimpole の共通性について、Esther は次のような感想を述べている。「もし、この二人がお互いに心から尊敬しあえれば、私は驚いたでしょう。ボーイソーンさんは物事をたいへん重要に考えるたちでしたし、スキンプールさんはすべてのことを軽く

見たちでしたから。」(15章) これら Jarndyce の二人の友人は、全く対照的な方法で大人の世界から逃避している。そして Jarndyce もまた自ら味わい得なかった子供の姿を、これら二人の歪んだ鏡の像の中に求めているのではなからうか。

Jarndyce は子供時代に戻ることで人生の危機を乗り越え、感情の貧しさも絶望も孤独をも克服することができるという、かすかな希望を持っている。しかし皮肉にもその対象として偽りの、ねじ曲ったイメージを選んだのである。Angus Wilson の言うように、Dickens は "second childhood is not the same as being a child"⁽⁸⁾ ということを告げようとしているかのごとくである。Richard の死の床で Jarndyce は、「黒雲は晴れた。私たちは皆、多かれ少なかれ盲目だったのだ」と語る。そしてその後で、「私もやはり夢をみていたのだよ」(What am I but another dreamer) と結んでいる。Jarndyce もまた Rick と同じく、空しい幻想に囚われていた弱い人間だったのである。彼の慈悲はかつての benevolent gentleman のように万能ではない。彼らとは異なった土台に立っている生きた人間の善を Jarndyce は示している。彼の eccentricity は、人間が本来対等であるべき相手に対して慈悲をかけるという、矛盾と苦しみを表わしている。お伽の国では自然であった慈悲そのものの持つ unjustness は、現実の社会にあっては異質のものとなる。初期の benevolent people に向けたのと同じ眼で、われわれが Jarndyce を見ようとするとき、彼の人間としての苦悩は eccentric なものに映ってしまうのである。慈善という unjust なものを自然な姿にすることのできるのは、超人間的な力だけなのかもしれない。このように Dickens は、Jarndyce の eccentricity を通して、人間の自己保全への強い欲求と、失った過去への憧憬とを、複雑な姿をとって表わしているのである。同時に Jarndyce の Skimpole への盲目的な態度は、後期の Dickens が、かつて自ら描いた Good Rich Man の持つ childishness に対する妄執的ノスタルジアを示しているように思われる。

Jarndyce の後の benevolent gentlemen は、すでに地上に降りた天使のごとく、昔のような魔力を持つことはない。人間としてできうる力をもって、人に慈善を施すだけである。Casby は昔のままの child-like gentleman のように見えるが、その裏には人間の利己の醜さを隠しているし、Miss Havisham や Magwitch の Pip に対する benevolence は Pip の忘恩という返報を受けている。Boffin に至っても、Bella Wilfer の利己心をなおすという目的においてのみ generous で、Betty Higden を貧しさと死の底から救うことはできない。

以上のように見てくると、Jarndyce の示す "eccentric gentleness" は決して単なる eccentricity ではない。人間が善を人のために行なうと称しつつ、実はその底に秘めている自己保全の表現に他ならない。また、子供らしい fancy を失って経験という代償を得た David や sensibility を金と引き替えにした Pip と同様に、Jarndyce の中にも失った子供時代の直観と想像力を懐しむ気持ちが、Skimpole に託した彼の空しい夢の中に秘められているのである。以上のような意味を含めて考えてみると、Jarndyce の "eccentric gentleness" は Dickens の描く "the Good Rich Man" の流れの中で、一つの分岐点となっていると言えるだろう。

Notes

- (1) Humphry House: *The Dickens World*, Oxford, 1942, p. 39.
- (2) Walter E. Houghton: *The Victorian Frame of Mind 1830 - 1870*, Yale University Press, P. 275.
- (3) George Orwell: *Critical Essays*, London, 1946, p. 5.
- (4) Angus Wilson: "Dickens on Children and Childhood", in *Dickens 1970*, Chapman and Hall, 1970, p. 213.
- (5) Lauriat Lane: "Introduction: Dickens and Criticism", in *The Dickens Critics*, Cornell University Press, 1961, p. 8.
- (6) George Brimley: *Spectator*, 24 September 1853, XXVI, p. 923-5.
- (7) F. R. and Q. D. Leavis: *Dickens the Novelist*, Chatto and Windus, 1970, p. 154.
- (8) Angus Wilson, p. 211.